

English Gerunds : A Minimalist Analysis Based on the Phase Theory

下飯屋, 翔

<https://hdl.handle.net/2324/1806779>

出版情報 : 九州大学, 2016, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)



氏 名 : 下仮屋 翔

論 文 名 : English Gerunds: A Minimalist Analysis Based on the Phase Theory

(英語動名詞研究: フェイズ理論に基づく極小主義分析)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近年の理論的研究の中であまり取り扱われていない英語の動名詞構文について、生成文法理論のフェイズ理論に照らして、文法的特徴を原理的に説明するものである。また、その目的のもと、通言語的な事実の観察に基づき理論的枠組みを精査するとともに、本分析が作用域解釈やその他の文法現象も適切に捉えられることを実証した研究である。

本論文の第1章は、分析対象となる3種類の動名詞構文の分類およびそれぞれの特徴を概観した。各構文に共通して、節の特徴を備えながらも、典型的な節とは異なり格位置にのみ生起するという特異な振舞いが示される。第2章では、本分析が立脚するフェイズ理論のモデルを同定するため、素性継承の有無に基づき枠組みを大別し、通言語的観点から妥当性を吟味した。また、Chomsky (2013, 2015)のラベル付けアルゴリズム分析の問題も指摘し、Chomsky (2000)が提唱する最初期の理論モデルが最もよく経験的な事実と一致すると主張した上で、理論的背景となるフェイズ、統語素性、素性照合、構造格の概念を導入した。第3章では、初めに、対格動名詞構文に関する Reuland (1983)と Pires (2001, 2006, 2007)の分析とそれらの問題点を指摘した。その後、経験的な事実から、当該構文が定形節と同様の CP 構造をもつと主張し、主要部 T の時制素性が欠如的であることが唯一の相違点であり、非フェイズ性を含む諸々の文法的特徴の要因となると論じた。特に、T の欠如性は、Chomsky (2000)のフェイズ理論の精神を追求する Pesetsky and Torrego (2001, 2004, 2007)の統語派生メカニズムと有機的に繋がり、本構文の分布を原理的に導出した。また、対格動名詞構文では格素性を欠く主語を想定するが、仮に格素性をもつ主語が派生に参入するならば、同一の派生原理から PRO 動名詞構文が得られることとなる。他方、属格動名詞構文は、内的には節の特徴をあらわす点で対格動名詞構文と類似しているが、主語が属格形であり、外的な文法的特徴は DP に類似することから DP-TP 構造であると論じた。この最大投射の違いから、両動名詞構文には *wh* 要素の抜き取りに関して容認性に差が生じる。

第4章以降は、これまでの提案のもと、従来説明が困難であった様々な文法現象を説明することで、本論の経験的基盤が堅固なものとなるように試みた。第4章では、初めに、第3章で導入したフェイズ形成の可否に基づき、フェイズ主要部の端素性に駆動される内的併合が談話効果を生じるという Chomsky (2008)の提案を鑑みて、数量詞句の作用域解釈を原理的に捉えた。次に、第2章で通言語的にみられる補文標識の一致現象から想定した主要部 C の解釈不可能な ϕ 素性と、第3章で採用した Pesetsky and Torrego の統語派生メカニズムから、Chomsky (2013, 2015)のラベル付けアルゴリズム分析の問題点について、更なる理論的道具立てを組み込むことなく克服した。そして、第3章で提案した動名詞構文の統語派生に、併合操作の適用方策から必然的に導出される外的ペア併合 (Epstein et al. (2016))の知見を組み込むことで、動名詞構文に

における接辞-ing の統語的地位を明らかにし、更には属格動名詞構文の統語構造をより自然な DP-NP 構造として修正するとともに、対格動名詞構文との交替可能性も原理的に引き出した。加えて、この説明方法は、主格独立分詞構文や名詞的動名詞や不定詞など、種々の文法現象に展開が見込まれることを示唆した。第 5 章では、まず、日本語のガ・ノ交替現象における属格主語の先行研究を概観し、Miyagawa (2011, 2013) の分析が経験的事実に合致する一方で、理論的問題点を抱えていると指摘した。そこで、第 2 章の議論から素性継承に関する想定を棄却し、第 4 章で導入された外的ペア併合に基づく動名詞構文の派生をもとに、より自然な統語派生を提示した。続いて、叙実動詞と非叙実動詞の補文は、一見すると等しく CP 構造をなすように思われる一方で、実際には多くの相違点がみられることを確認した。他方、叙実動詞の補文は、統語的にも意味的にも動名詞構文と類似するものの、顕在的な補文標識の有無を始めとして、僅かな違いが観察される。この要因を探るため、本論の重要な想定となる主要部 T の欠如性を試金石として叙実動詞の補文を考察すると、定形節や動名詞構文とは異なる特徴をもつことが明らかとなった。

第 6 章では、これまでの議論を総括し、最初期のフェイズ理論の枠組みが経験的な事実から妥当であることを示した。特に、本分析が主張する主要部 T の欠如性を反映することによって、英語の動名詞構文だけでなく、通言語的な文法現象を広範に説明できることが実証され、生成文法理論研究の発展に貢献することを論じた。